

## 歴代誌第一 22 章 5 節 「用意した人生」

### 1 A ダビデの志

#### 1 B 選ぶ場所

#### 2 B 荘厳な神殿

#### 3 B 用意

### 2 A 霊的富の場所 - 教会

#### 1 B キリストという土台

##### 1 C キリストにある建築

##### 2 C キリストの身丈

##### 3 C 結びつき

#### 2 B 働きの真価

##### 1 C 主の任命

##### 2 C 主への奉仕

### 3 A キリストという目標

## 本文

歴代誌第一 22 章 5 節を開いてください。私たちの聖書通読の旅は、先週、歴代誌第一 21 章まで来ました。午後に、22 章から 26 章までを読みたいと思いますが、ダビデの治世が終わりにさしかかっています。彼が主に対して、死ぬ前に行いたかったこと、何とんでも息子ソロモンに受け継ぎたい事業がありました。神殿建設です。主が選ばれている場所が、彼がイスラエルの人口調査をするという罪を犯して、その赦しを得るために主に指定された場所が、その場所であることをダビデは悟りました。そこでダビデは、ここに神殿を建て、また神殿礼拝中心の国づくりをするために、組織を作っていきます。これが、午後に学ぶことです。今朝は、22 章 5 節に注目したいと思います。

ダビデは言った。「わが子ソロモンは、まだ若く力もない。主のために建てる宮は、全地の名となり栄えとなるように大なるものとしなければならない。それで私は、そのために用意をしておく。」こうして、ダビデは彼が死ぬ前に多くの用意をしておいた。

今朝見ていきたい主題は、「用意をしておいた」という部分です。ダビデは、自分の罪のために全焼のいけにえ、和解のいけにえを捧げた祭壇の場所が、かねてから願い、志していた神の宮を建てるどころなのだ、と悟りました。そこで彼は、これまで周囲の国々との戦いの中で分捕り物として取ってきた金銀、青銅、鉄を聖別して主に捧げていました。準備をしていたのですが、今、主がここに宮を建てることを御心としておられることを悟

って、それでその準備の作業を加速化させました。3-4 節を読みますと、数えきれない程の杉の木を用意し、鉄も青銅も量り切れない程、用意しました。

## **1 A ダビデの志**

### **1 B 選ぶ場所**

なぜ、ダビデはここまで感動して、主の宮に情熱を注いでいたのか、私は正直、疑問でした。一度、自分の宮殿よりも神の箱が天幕にあるのは良くないと思い、預言者ナタンに相談したとき、ナタンに神が、「わたしがそんなことを命じただろうか？」と問いかけられました。ダビデにこれだけ良いことをしてくださったが、これからもよくしてくださる約束を与えておられましたが、なぜその時にあきらめなかったのでしょうか？

主は、必ずしも神殿を建ててはいけなく、とは命じておられません。あなたが神殿を建ててはならない、と言われただけで、神殿建設そのものを否定されたわけではありませんでした。事実、主はダビデに、「彼（ソロモン）がわたしの名のために家を建てる。（10 節）」と語られていたのです。

そして大事なものは、ダビデがモーセの律法をこよなく愛していたことです。主がモーセを通して、約束の地に与えられていた安息は、「選ばれた場所でいけにえを捧げる」ことでありました。「ただあなたがたの神、主がご自分の住まいとして御名を置くために、あなたがたの全部族のうちから選ぶ場所を尋ねて、そこへ行かなければならない。（申命 12:5）」ダビデは、未だ自分たちを攻める敵どもと戦わなければいけませんでしたが、けれども、晩年には周辺の国々はすべてイスラエルに従属していました。貢物を収めにやって来ていました。ですから、安心してここに住むことができるようになっています。そして、その後の主の約束が、主がご自分の住まいとしてご自分の名前を置く、選びの場所にいけにえを捧げなさい、と主がモーセに語られていたのです。

### **2 B 荘厳な神殿**

そして、ダビデはこの神殿を、「全地の名となり栄えとなるように大いなるものとしなければならない」と言っています。モーセに命じられた幕屋は、外から見れば実に地味なものでしたが、ダビデは荘厳なもの、栄華に満ちたものにしなければならない、と言っています。これは、どうしてでしょうか？ 一般の国々でも、異教の神殿においても、荘厳なものがたくさんありますし、王たちは首都を最も栄えたところにしようしますが、その野望とダビデは同じことを抱いているのでしょうか？

いいえ、そのような人間的な要素によって願ったものではありません。これもまた、ダビデが勝手に思ったことではなく、神からの啓示によるものなのです。この世の終わりは、どうなるのか？ 聖書は明確に描いています。それは、この地上に天地万物を創造した神が国を造ることです。そして神が王として選ばれた、ご自分の子キリストが王となってこの地上を統治することです。その首都はエルサレムです。そしてエルサレムには、キリストご自身が神殿を建て、ご自身が王として、また祭司として、その王座に着かれるのです。その栄光と富は、イザヤ書など、預言者たちが将来の幻を見ました。あまりにも輝かしい幻です（60 章）。そして、この天地が滅び、

新しい天、新しい地を神が再創造されるとき、新エルサレムは、宝石の輝きをもった土台、ガラスのように透き通った純金による城壁、そして真珠による門など、神の栄光と美を反映したものになっています。

ダビデは確かに、将来の神の国を信仰の目によって見ていたに違いありません。そして、その体現の一部が、ソロモンによって成し遂げられることも、神の語りかけによって知りました。それでこの神殿を栄華に富んだものにするのに情熱を抱いたのです。

### 3 B 用意

そして、ダビデは決して時間を無駄にすることなく、あらゆる機会を使って、金銀や青銅、杉の木、鉄など、前もってあらゆる材料を用意しました。それから、23章から27章に、神殿礼拝をするための祭司、レビ人、そしてイスラエルの軍人たちの配置を組織立てました。彼は、目標がはっきりしていたのです。その場限りの仕事ではなく、永遠の神の名が置かれる神殿を建てるという、明確な目標をもってその半生を過ごしたのでした。

私たちの人生には、神によって立てられた計画があります。計画には目的があり、また進むべき目標があります。そして私たちの人生は、その目的と目標に向かっての準備であるということができるでしょう。私は、先週の説教で、海外での奉仕のための英語の聖書講義の準備について話しました。御言葉を一節ずつ読み明かしていくのに、数多くの準備が必要です。その準備の過程は、説教壇で語っている時のようなスムーズさは全然なく、あっちに行って、こっちに行って、悩みながら進んでいます。トンネルの中にいるような気分になることがあります。けれども、全貌が、最後の段階で開けます。ちょうど登山で頂上近くを歩いているのに、一向に頂上が見えない時、木々がなくなり、突如として山から周囲の全景が見えるような気分です。

説教をすることについて、「準備をすることは、その時、その時の聖霊の導きに拠り頼まず、硬直化する。」という人たちがいます。とんでもない過ちであり、むしろ準備をしないことによって、聖霊の導きではなく、自分の思いや気持ちをただ話していて、神の御言葉を宣べ伝えていない過ちを犯します。

一般的に、準備というものは全てに言えますね？言語学習の例にとりますと、だれもが、外国語を習いたいと思うときに、その流暢に話している姿にあこがれます。そしてそれをそのまま真似ようとしています。けれどもできないので、あきらめます。一方である人たちは、せつせと文法の勉強、単語を暗記します。そして書くにしる、話すにしる、短い文の作成から始めます。まるで自分が、小学生の子に生まれ変わった気分です。自尊心はこなごなに碎かれます。けれども、ある時に、急に話せるようになります。これまで蓄積していたけれども、それを構成できていなかったものが、一挙に構築した言語体系ができていて、話せるようになるのです。

霊的にも同じです。はっきりとした目標があります。けれども、その準備は回り道を思いっきりしている、あまりにも地味でつまらないと感じるかもしれません。そして、大人、成熟した状態をもて、ただ表面的にそれを真似ようとしています。その度に、「ああ自分ではできない」と思ってあきらめます。そうではなく、その与えられた小さな営み

をしっかりとこなす必要があるのです。

## **2 A 霊的富の場所 - 教会**

聖書に啓示されている、神の全体のご計画によりますと、終わりには、地上における神の国があり、その後、新天新地が再創造されて新しいエルサレムができるのですが、そのような目に見える、可視的な栄光と富は、今は約束されていません。カトリック教会は、バチカンに荘厳な聖堂を立てていますが、それは神に命じられていことです。また教会によると、その教会堂をどれだけ目を見張るようなものにするか躍起ですが、それが神に命じられているわけではありません。

けれども、今の時代、イエスが天に昇られて、再び戻ってこられるまで、神の右の座におられるまでの時代は、これらの栄光と富が霊的に与えられ、私たちが集まり、聖霊がそこに住んでくださり、イエスの名がそこに置かれていることによって、教会が神の家であると教えています。パウロは、エペソにある教会にこう教えました。「神はキリストにあって、天にあるすべての霊的祝福をもって私たちを祝福してくださいました。(1:3)」すべての霊的祝福をもって祝福して下さったのです。そしてこれは、「キリストの測りがたい富(3:8)」と呼んでいます。目には見えませんが、教会はキリストにある栄光の富に満ち溢れているところなのです。

### **1 B キリストという土台**

それでパウロは、コリントにある教会に、教会が神の家だと話して次のように説明しました。コリント第一 3 章 10 節を開いてください。10-11 節を読みます。「与えられた神の恵みによって、私は賢い建築家のように、土台を据えました。そして、ほかの人がその上に家を建てています。しかし、どのように建てるかについてはそれぞれが注意しなければなりません。というのは、だれも、すでに据えられている土台のほかに、ほかの物を据えることはできないからです。その土台とはイエス・キリストです。」パウロは土台を据えました。それは、イエス・キリストご自身であるというものです。

### **1 C キリストにある建築**

土台がなければ、建物はもちろん立ちません。けれども、土台を据えることほど、表向きは地味な作業はありません。その土台が、「キリストを知ること」であると言います。あまりにも多くの方が、キリスト教について、また教会について、「人が行っていること」に注目します。そして、クリスチャンとしての行い、クリスチャンとしての活動に注目して、それを真似ようとします。けれども、その目立つ部分だけを見ているので、実際に行っていると長続きしない、苦しくなります。自分のしていることが、自己実現や自己満足の域を越えません。それは、土台を据えていないからです。その目に見える部分はあくまでも、「イエス・キリストご自身を知る」というところから出てきているのです。

パウロがコロサイにある教会に手紙を書いています。その教会には、知恵や知識と呼ばれるいろいろな考えが教会に中に入り込んでいました。また、特殊な神秘的体験をしたという人たちがいました。それで、「これ

はずごい、あれはずごい」といって、教えの流行に引き回されていました。けれども、パウロは彼らにこう教えたのです。「このキリストのうちに、知識と知恵との宝が隠されているのです。(2:3)」「あなたがたは、このようにキリストを受け入れたのですから、彼にあって歩みなさい。キリストの中に根ざし、また建てられ、また、教えられたとおりの信仰を堅くし、あふれるばかり感謝しなさい。(2:6-7)」キリストの中に根ざして、建てられ、そしてこの信仰を堅くするのは、そこからあふれる感謝をそのまま言い表します。

けれども、キリストを知ること、聖書の知識を得ることには大きな違いがあります。キリストを知るとは、ちょうどキリストと同じ屋根の下で暮らして、この方の一面を少しずつ知っていくことです。そこには葛藤があります。人格と人格の摩擦があります。誤解もあることでしょう。弟子たちはイエス様をたくさん誤解しました。けれども、このような人格の触れ合いの中で、この方をこの方として知っていくのです。だから、その人にとっては、キリストはすべてなのです。自分が、自分の口と言葉で、イエス様のことを言い表せますでしょうか？ 聖書の知識を語っても、イエス様との交わりを分かち合えないのであれば、それはキリストの知識ではないのです。

## 2 C キリストの身丈

パウロは、エペソにある教会に対しては、教会はキリストのからだであり、私たちがキリストの身丈にまで達する、大人になると言っています(4:13)。ちょうど、自分が思春期に成長して、父親、母親と同じ身丈、いやそれ以上になるように、私たちも成長します。

## 3 C 結びつき

そして具体的には、キリストによって立てられた牧者が御言葉を教えることによって成長し、そして各人が建物の一部であり、「備えられたあらゆる結び目によって、しっかりと組み合わされ、結び合わされ、成長して、愛のうちに建てられる。(4:16)」とあります。したがって、教会においてキリスト者が交わるのです。互いに、実質的な奉仕に携わり、互いに仕えて、そしてその触れ合いと関わりによって、キリストが愛されたように兄弟を愛することを学びます。キリストとの交わりに摩擦があるように、互いの交わりにも摩擦があります。自分に合った人、自分の言っていることを否定しない人、自分のやっていることに同意する人だけを受け入れるのであれば、それはお仲間サークルであっても、キリストの教会ではありません。キリストが愛されたように、行いと真実をもって愛するのです。これによって、キリストの身丈にまで成長します。

## 2 B 働きの真価

### 1 C 主の任命

奉仕において、とても大切なことがあります。それは、「主が自分に命じられて、これを行っているのか、どうか。」であります。自分が、これをやってみたい、あれをやってみたい、というボランティアではないのです。自分の能力を試すところではないのです。自分の能力や魅力を発揮させて、そこにキリストの名を絆創膏のように貼り付けても、すぐに化けの皮が剥がれます。神殿における奉仕は、神が任命した祭司とレビ人によって行われました。私たちがキリストにあって、祭司でありレビ人です。「主にこのことが命じられているのだ」という確信や意

識、その信仰がなければ、その働きはキリストが行っているものではなく、人間のものなので実が残らず、枯れてしまいます。

## 2 C 主への奉仕

もう一つ、奉仕において考えなければいけないのは、「誰に仕えているのか」であります。具体的には、人に対して仕えているのですが、いいえ、主が置いておられる人々に仕えているのですから、本質的には主ご自身に仕えているのです。主に対して行っているのであり、ですから人々の期待に応えるのではなく、主の期待に応える、主を喜ばせることに集中するのです。

他の国でのキリスト教会では、一つの良い習慣があります。教会において、人から良いことをしてもらった時に、口から即座に出てくる言葉は、「主に感謝します」であります。「ありがとう」と言えば、それは、その人にありがとう、と言っているのですが、いいえ、その人がしているのではなく、その人はあくまでも神に用いられているのです。だから神に感謝します。

誰のためにやっているのか？ 主のために行っています。主に仕えている中で、人々の期待に応じることができないことがたくさんあります。すべての人を喜ばせることはできません。自分が行っても、それが意図したとおりに受け止められることは、普通ありません。けれども、それが主の望まれていることではありません。主から命じられていること、主から召されていることを忠実に行うことが、主を喜ばせるのです。どちらが主人かを思い出すとよいでしょう。「お客様は神様」ではなく、「神様が神様」なのです！

そして、たとえ人々から反対されても、嫌われても、ある時はほめられたり、感謝されたりしながら、それでも、人に対して行っているのではなく、主に対して行っているの、決してその態度と姿勢を変えることなく忍耐して行います。そうすれば、その行き先にはキリストご自身とその御国という栄光が待っているのです。

## 3 A キリストという目標

私たちがしっかりと、キリストという目標とその御国を見ていて、その目標の中で今、クリスチャンとしてやっていることをやっているでしょうか？ 私たちは、まず、自分が死ぬ時に、あるいはキリストが生きている時に教会のために戻ってこられる時に、自分が真価を試されても残せるものを起こっているかどうかを、吟味しなければいけません。目の先のことを表面的に行っているのか、それとも、将来の希望のために今、地道な準備をしているかを自問する必要があります。

十人の乙女のたとえがあります。それは、イエス様が教会のために戻ってくることを喩えたものです。花婿が花嫁を迎えに彼女の家に行きます。そして彼女を引き取って、花婿は彼女を自分の家に連れて行き、そしてそこで結婚式を行ないます。花婿が花嫁を引き取り、花婿の家に行く時に、花嫁の後ろについて行って、ともしびを持ち、行列を作り、歩くのです。

五人は賢い乙女でした。ともしびのための油を用意していました。そして五人は愚かな乙女でした。油を用意していませんでした。花婿がなかなかやってきました。それで眠くなってしまい、寝てしまいました。その時、「花婿が来た」という知らせが来ました。愚かな乙女は、お店に行き油を買いに走りました。賢い女はそのまま行列を組み、花婿と花嫁について行きました。愚かな乙女が花婿の家に遅れて着いたときには、戸が閉められていて、入ることができませんでした。このような教訓に満ちた喩えです。

だから私たちが今、しなければいけないことは何でしょうか？もちろん、油を買いに行くことです。「いや、大丈夫でしょう、すぐに来るでしょう。」という言葉は私たちが言うてはいないでしょうか？何か問題があると、「大丈夫！」で済ませ、その問題を避けて過ごしていないか？あるいは、目の前にある楽しみを追っているだけになってはいないか？それがクリスチャン生活だと思っていないか？いいえ、表面的な活動ではなく、自分が果たしてキリストのうちに歩んでいるかどうか、教会の中で、兄弟姉妹との関わりの中で主から教えていただくのです。または、自分の家庭で、職場で教えられることもあるでしょう。

ともしびだけを見つめるのではなく、そのともしびの燃料となっている油に心を留めるのです。その油は聖霊のことを指していますが、聖霊の働きの中に、私たちがしっかりとキリストのうちに歩むことが含まれます。イエス様を日々、見つめていき、じっくりと語り合い、その中に歩んでいるたゆまぬ努力です。そして、聖霊が、私たちが主に呼ばれている、主に命じられているという意識を与えてくださいます。聖霊が、私たちがすることは人に対してではなく、主に對するものであるという確認を与えてくださいます。

主は必ず、このような地道な歩みを成功させてくださいます。決して、きらびやかではありません。私も、自分自身、このような説教が嫌いでした。ある牧師さんが、牧者の働きとして、地道にじっくりと、キリストが一人一人に形造られるように、御言葉の説教を中心とする教会形成について説教していた時、「もっと派手にやりたいよ！」という、嫌な肉の思いが出てきました！けれども、ぜったいに成功するのです。単語の暗記、文法の学習なのですが、絶対に、森の向こうに見える、壮大な、栄華に富むキリストの御姿があります。そして、この方の支配される、壮大な、正義と平和に満ちた御国が広がっています。決してあきらめないでください！